



か れいおうはんへんせいしょう 加齢黄斑変性症 について

問 稲城市保健センター
☎378-3421

最近、中途視覚障害の原因として加齢黄斑変性症がテレビや新聞で取り上げられるようになりました。欧米では、中途失明の第一位の原因となり、日本でも増加傾向がみられることから、今後ますます重要な病気になってくるでしょう。男性の方が女性に比べ3倍多いです。発生要因として、加齢、喫煙、高血圧、遺伝などが挙げられています。一般に、症状はゆっくりと現れます。物が歪んで見

える（変視症）、物が小さく見える（小視症）、中心が見えにくい（中心暗点）などが初期には多い症状です。多くの場合、視力も徐々に低下します。突然大量の出血を起したりすると、急激な視力低下が現れることもあり、失明に至る場合もあります。

病態は、脈絡膜から新生血管（正常では存在せず、新たに発生してくる異常な血管）を生じる病気です。ほとんどの場合、黄斑部と呼ばれる眼底の中心部で起こります。

加齢黄斑変性症は、人によって重症度や進み方がかなり違います。進まないことも、まれには自然に治ってしまうこともあります。治療が難しく、特効的な治療法

は今のところないと言ってよいでしょう。治すということより、現状維持、進行を遅らせることに主眼が置かれているのが現状です。

現在、最も注目されているのは、脈絡膜新生血管を委縮させる薬物（抗VEGF薬）を硝子体に注射する方法で、治療の主流となっています。また、光線力学療法、硝子体手術という治療もあります。この病気は多様で、万能といえる治療法はありませんが、治療の選択肢が増えたことで視機能を改善維持できるチャンスは確実に大きくなっています。そのために、眼科医専門医の診断を受ける必要があります。

稲城市医師会 南 早紀子